
萩堂夕と愉快的仲間たち

北野 鹿乃子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

荻堂夕と愉快的仲間たち

【Nコード】

N6520A

【作者名】

北野 鹿乃子

【あらすじ】

自分の父親（悪魔の科学者でも可）にふざけた実験の被害者にされた娘・夕。そのおかげで息子となってしまうた！しばらくは元に戻さないと言い切る父、適当な母、シスコンの兄、唯一協力してくれる（が、方向性は間違いの）姉、一応男であるにも関わらず夕に求愛するクラスメイト（ ）、などただでさえ苦悩の多い夕の周りは騒がしい。苦悩を乗り越え、夕は女に返ることが出来るのか？！

プロローグ く萩堂々の呟き（前書き）

初投稿。使い古されたネタではありますが、どうか鼻で笑い飛ばして…

プロフィール ～荻堂夕の眩き～

名前 おぎどう 荻堂 ゆう 夕

性別 現在男

年齢 15歳

誕生日 8月7日

血液型 O型

趣味・特技 空手少々

家族構成 父・母・兄1人・姉1人

と、どこにでも居るような普通の高校生している私。

ただ一点を除いて…

そう…察しの良いあなたにはもうお分かりだろう。上のプロフィールを見る限り一つの疑問がわくはずだ。

性別 現在男。現在って?!と思われた方も多いだろう。

そう私は、元々女だ!

ただ望んで男になった訳では無い。断じて無い!そこは強調させて頂く!

なら、何故男になってしまったかつて?

誰か私の不幸な身の上話を聞いてくれますか?

事の始まりは受験シーズン真っ盛り、私の父親こと悪魔の科学者のふざけた実験によって引き起こされた…。

その1 父親は悪魔だった

年が明け、受験受験の日々を送る荻堂夕は粉雪舞い散る中、普段と同じように家路についていた。

（寒う、今日雪降るって言ってなかったのに）

肩まである少し茶色掛かった髪を風の吹くままに任せ、早足で歩くこの辺りではちよつとした有名人である夕。その要因は整った顔立ちがほとんど、明るく頭も良いということもあり、ファンクラブもあるほどだ。しかし美少女としてご近所に知れ渡っていることは本人は全く気付いていなかったが。

しばらく歩くと、住宅街の中にひときわ目立つ赤い屋根が見える。

そこが荻堂家である。

某製薬会社で真面目社員をしている父・秋彦あきひこと代々受け継がれる高校の理事をしている母・日和ひよりのお陰でこの辺りの住宅街では一番大きく立派な家であった。夕は、その家族を守るはずの家で悪魔が待っているとも知らず、玄関に向かう。

「ただいまあ」

・・・・・・

（…まだ誰も帰ってないかあ）

玄関からまっすぐ続く廊下は薄暗く、家の中には人の気配は無かった。

「お帰り」

突然、薄暗闇の中から先ほどの返事が返ってきた。

「うわあっ！…びっくりしたあ」

さっきまで誰もいないと思っていたため、ホントに飛び上がるくらい驚いた。

「お父さん、居たんならもっと早く言ってよ！ていうか、電気も点けないで何やってんの？」

「いや、今日はイイコト思いついたからちよつと会社休んじゃっ

た」

語尾に　が付くくらい陽気に言い放つ秋彦。

「…今度は何思いついたの？」

今度という言葉が示す通り、これまで科学者である秋彦は何度か『イイコト』と称し、数々の発明（と書いて迷惑と読む）を生み出してきた。

「ひ・み・つ」

今度はウインク付き。

黙ってじつとしていれば整った顔立ちをしていて、美中年とも言えるのに（少々童顔ではあるが）言動が標準から思いつきりはみ出ているため変人扱いである。

「秘密つて…」

今までのことを振り返るとげんなりする夕であつた。

人を小さくしてみようと人を肉体的に強くしてみよう、頭を良くしてみようetc．．．これらはまだいい方で、とても口に出せないことばかりだ。しかも、イイコト（自称）を試すにあたつて必ずと言っていいほど自分の子供を利用する。実の子にも関わらずだ。そして、そのほとんどが失敗であり、副作用がとんでもないことになる。変な出来物があちこちにできたり、三日三晩眠り続けたり、無駄なことばかりだつた。

そのため夕をはじめ兄の春信、姉の朝美は常に父親を警戒しながら暮らしている。母親は知つてか知らずか、はたまた見て見ぬふりか父親の所行を止めることはなかった。

「まあその内教えるよ」

満面の笑みで楽しそうにそう言って、一階の奥にある父専用実験室（夕たちは恐怖を込めそう呼ぶ）へと姿を消した。

「ヤバイ…非常にヤバイ！今度は一体何するつもりだろう？！」

ため息とともにそうこぼし、しばらくは父親から離れていよう！と決心する夕だつた。

数日後

父専用実験室にてひっそりと不敵な笑い声が聞こえた。

もうすぐ受験ということ、夕は夜遅くまで机に向かっていた。すでに家族全員が夢の中であろう時間帯であった。

「もうこんな時間かぁ。そろそろ寝よつかな」

と欠伸をしていると、ふと誰かがドアをノックする。

「まだ起きてるのか？」

と、ドアを開け秋彦が顔を覗かせた。

「うん、もうそろそろ寝ようと思ってたところ」

「そうか、程々しておかないと体壊すぞ…ほら」

と、湯気の上がるマグカップを差し出す。

「え?! あ、ありがと…」

(どうしたんだろ? こんな事したこと無いのに)

普段は子供に関わりうとしない(イイコト以外)秋彦である。何事であろうかとマグカップを受け取り、中身確かめる。何の変哲もないホットミルク。少々不審に思ったが、これまでの勉強疲れで正常な判断力を欠き、数日前のやりとりや今までの悪魔の所行も忘れて、すっかりそれを口に運ぶ。

その瞬間秋彦の口元に笑みが浮かんだ。

いつの間に寝てしまったのか、ふと目を開けるとふんわりと明るくなった天井が視界に入る。

(… 明るい?!)

「ヤバいつ! 今何時?! 学校っ!!」

飛び起き枕元にある目覚まし時計を確認した。少し前、朝起きれない夕に兄の春信が買ってくれたシンプルな日付付きのデジタル時計。

夕はもう少し女の子を意識したものは買えなかったのかと内心思っていた。

時計が示していたのは、今日は日曜日であること。安心した夕はゆっくりベッドから這い出す。

（何かさっき声低かったような…？）

「あー、あー」

昨日までの声とは明らかに違った低い声。

（昨日ちよつと夜更かししちゃったから風邪引いたかな？ヤバいなあ）

そう昨日のことを思い出しながら洗面台へ向かった。

鏡を見ると不思議と違和感を感じる。まだ少し寝ぼけているんだろうと思いつつ顔を洗う。

「調子はどうだ？」

突然話しかけられ顔を上げると鏡の端に秋彦が映りこんでいる。

「何か変わったことはないか？」

少々興奮気味に夕に詰め寄る。夕は訳も分からずとりあえず応えてみた。

「と、特に何も無いけど…」

「その声は?!」

目をギラつかせますますテンションの上がる秋彦。

「え?風邪…かな？」

「ちよつと確認するぞ!」

「はあ?ちよつと何?!何すんの?!?」

何をとち狂ったのか夕の着ていたTシャツを捲り、何かしら確認した後落ち着きを取り戻した。もちろんその間中夕は暴れ、秋彦はボコボコに殴られていた。それにも関わらず秋彦の顔には微笑みがあった。

「今回のイイコトは成功だよ。夕」

「は?!」

耳を疑ってしまう夕。

「素晴らしい！素晴らしいよ！！間違いなく男になっている」

夕はあまりのことに呆然としてしまっていた。

段々と思惑回路が繋がっていき、自分の体を確認してみる。体の状態が分かるにつれて怒りがこみ上げてくる。小さくはあったものがあったはずの胸の膨らみはなくなり、代わりに股の間にあるはずの無いものがあつた。

（…何で?!男になつてる!?!）

自分に酔つたままベラベラとイイコトの素晴らしいさを語っている秋彦に、今度は夕が詰め寄る。

「どうして、こんな、ことに、なつてるんですか?!」

口調は丁寧だが単語単語に力がこもる。

「よくぞ聞いてくれた!」

何の悪びれもなく答える。

「まず、今回のイイコトのテーマだが、ずばり、お分かりの通り女を男にしてみよう!!だ!」

言い切った!それはもう背景に波がザバーンと来るくらいに。

「と言うわけで成功なわけだ」

それだけ言つと秋彦は身を翻し去つていこうとした。

「待った!もうこうなつた原因とかどうでも良いからコレ元に戻してよ!!」

もの凄い形相で抗議する夕。

「え?無理だよ」

「は!?!」

「だつて元に戻すことは考えてなかったから」

「はあ?!普通はちゃんと考えるでしょう?!」

秋彦に掴みかかりガクガクと前後に揺さぶる。

「夕。」

急に秋彦の声に冷たさが宿る。

「俺を誰だと思つてるの?」

そこではつと我に返つた夕。

そう、この男は普通の人間ではなかった。

外面は真面目人間。しかしその実体は冷徹極まりない天才的な頭脳を持つ悪魔であった。逆らうとまた突拍子もない実験の的にされる。

（何でこんな奴が父親なんだ?!）

夕の叫びは口にもすることも出来なかった。

その1、父親は悪魔だった（後書き）

更新が遅いですm（　　）m頑張りますのでどうか今後ともよろしく願います。

その2 クラスメイトは変人？

春の陽気が辺りを包む。

桜の花びらが舞い散る中、この明るい空気に負けないくらい輝く希望を胸に抱いた新入生達が歩く。

そこに一人、それとは対照的に陰を背負った男子生徒がいた。

（この違いは何なんですか?!）

他者と自分を比べ、更に沈む。

そう、彼（彼女）こそがこの物語の主人公・荻堂夕である。

（こここのセーラー着たかったのに…）

男子の制服・学ランを着てそう思った。

ここ1・2ヶ月の間自然と女に戻ることを夢見ていたが結局夢は夢のまま。秋彦も元に戻すことなんか考えている訳がない。

結果、いつ戻るかの保証もなく当面の間は男として生活しなければならなかった。

ここで気になるのは家族の反応である。あの日あの時果たして家族は?!

母・日和

「あらまあ、また秋彦さんイイコトなさったのお？まあ、なつてしまったものは仕方ないわねえ（ニッコリ）」

いつものおっとりした口調で心配など微塵も感じさせない。

兄・春信

海外赴任中。夕に対して極度のシスコンでウザくなるため連絡行かず姉・朝美

「あーあ、こんなことばかりして何になるのよお父さん。全く私たちの身にもなってみてよ…でも、なかなか美少年ね…（ジュルリ）」

いつものことだと呆れながら心配はするものの最後の台詞がヤバイ。

と、こんな家族に囲まれた夕はそのまま学校にも行けず、卒業式も行けないまま中学生生活を終える羽目になった。

受験に関しては元々日和が理事長を務める高校を受けるはずだったので、日和の権力で夕を男として受けさせ、そのまま入学させた。ちなみに、朝美はこの高校の保健医である。セクシーさと気さくさで男子生徒からも女子生徒からも大人気。

夕が教室にたどり着いた頃にはすでにほとんどの生徒がいた。

この姿を大勢の人にさらすことがほとんど初めてのため、夕はこれまでの人々の視線が自分に集まるのを感じていた。

（どっか変なのかな？）

夕はそう思っていたが、実際は元美少女、現美少年であるので注目されていることを気付くはずもなかった。

「ねえ君…」

声を掛けられて振り返ると夕よりも少し背の低い、眼鏡をかけた少年。

パシャパシャパシャ

「!?!」

いきなり首から下げていたカメラで夕を撮り始める。

「何?!」

「君、いいねえ〜きつとこの写真高値で売れるよ」

すっかり満足しきった様子で夕に話しかける少年。突然起こった事に頭がついていかず呆然とする夕。

「おっと、失礼。僕は^{おおくほこうへい}大久保公平。よろしく」

満面の笑みで握手を求めた。

「…わた、お、俺は緑川夕。よろしく」

女が男になるなんて馬鹿馬鹿しいことを信じる人がいるはずもない

が、念のため母・日和の旧姓を名乗って高校に通うことにしていた夕は、とりあえずそう応え手を握り返した。

「いや、僕、君みたいな顔の良い人の写真を撮るのが趣味なんだけど、そのおかげでとある人々によく売れるんだ」

妙なハイテンションで語っていた公平は急に小声で囁く。

「きわどいものほどよく売れるんだけど、快く僕の趣味を手伝ってくれれば、それなりのお礼はさせてもらうよ？」

「はあ……」

公平の言ったことを把握できず生返事を返す。

「ところで！」

元の調子を取り戻し、また夕に話し始める。

「君、荻堂夕に似てるよね？親戚とかなの？」

「……え？！は？あつ！ちつ、違うよ！違う。誰それ？」

（何で私のこと知ってるの？）

狼狽えながらも何とか誤魔化す。

「君、荻堂夕を知らないの？」

「はあ、まあ」

気の抜けた返事をしながら、自分を知らないのかと言われても……と思いながらも話を聞く。

「荻堂夕と言えばこころじゃ下手な芸能人よりも有名なんだよ？美少女で、頭も良い。友人も多いし、更に信頼も厚いetc……だからファンクラブができるほどこの辺りでは有名なんだよ」

（何故……？）

夕は知らないところで数々の情報が回っていたことに軽く目眩を覚える。

「かく言う僕もファンの一人なんだけど……夕ちゃん、この学校に入るって聞いてたのに見つからないんだ。誰かに聞こうにも夕ちゃんと同じ中学の人はここに来てないし」

そう、幸か不幸かこの学校には中学時代の夕を知るものは入学していなかった。日和が手を回したとかしてないとか。

「……」

もう言葉も出ない。しばらく固まっていたが、目眩に耐えきれずふらついてしまう。

「おっと、危ない」

教室の入り口付近で話していたため、今入ってきたばかりの男子生徒にぶつかった。

「ごめんなさい」

力無くそう言い男子生徒を見上げる。

その顔は夕と同じくらい整った顔をしていた。しかし、夕がかわいい部類であるのに対して彼は文句無しにかっこいい部類である。

「…確かに荻堂夕に似てるなあ」

さっきの会話を聞いていたのか夕の顔をまじまじと見ながら言う。

「はあ？」

「わりいわりい、俺も夕ちゃんのファンだから」

悪いと言いながらその顔は笑っている。

「君も同志か」

公平が少年に握手を求め、少年はにっこり笑いながらそれに応える。

「そして、君もよく売れそうだ」

そう言う少年を撮り始める。少年はノリよくポーズをとっていた。

（この二人何なんだ？）

一人置いて行かれた夕の脳はオーバーヒート寸前だった。

「あつ、俺は井上龍二。いのうえりゅうじよろしくな」

ウィンク付で自己紹介した。

「いいねえ、その表情」

すでに教室中の注目を集めていることに気付かず撮影会を続ける二人を見ながら壊れかけた頭で夕は思った。

何故私の周りにはこんな変な奴らばかりなんだ？！

これからの高校生活を考え、思わず涙する夕だった。

その2々クラスメイトは変人?々（後書き）

とてつもなく遅い更新。少しでも早くできるようがんばりますm（
| |）m感想、評価など頂ければ幸いです。

そのく姉も変人だった（前書き）

随分間が空きました。すいませんm（――）mようやく更新できました。今回ちょっと短いのですがよろしく願いします。

そのく姉も変人だった

「もう、無理！！限界！」

そう叫びながら消毒液の匂い漂う保健室に飛び込む夕。

「まあまあ落ち着きなさいよ」

優しい声で返すのは姉であり、この学校の保健医でもある朝美であった。

朝美はこの学校でもの凄い人気を誇っている。誰が見ても美人で、スタイル抜群。その容姿だけでなく優しく穏やかな性格で、男女問わず人気だ。

ただ、美少年好きで時々怪しい発作に見舞われることがあるのだ。

生徒には隠してはいるが、何人かは朝美の危ない目つきに気づいているとかいないとか。

「誰かいたらどうするのよ」

優しい声で夕をなだめる。

「だって…だって！あの二人、いつも目立つようなことばかりするんだもん！」

涙ぐみながら訴える夕。前回言った通り、いくら女が男になったという馬鹿馬鹿しいことを信じる人がいないとしても、人目を避ける方がいいに決まっている。

「公平はライフワークとか言って毎日カメラ向けるし、龍二はそれに毎回乗るし、二人でやればいいのに必ず私を巻き込むし！！」

「井上龍二さんと、大久保公平くんか…」

ひとしきり愚痴っていた夕は、ふと姉の不審な目つきに気付いてしまった。

「…龍二くんは本当イイ男だし、公平くんもなかなか悪くはないわ

ね……」

そう呟き、空中を見つめ、自分の世界へトリップしている。

「……お姉ちゃん？」

恐る恐る声をかける。

「ふふ……ふふふふ……」

すでにイっちゃった目つきで悦に入った笑みを浮かべている。

「お姉ちゃんーん！現実に戻って来てえー！」

肩をしっかりと掴み、激しく揺さぶる。

「はっ！？」

ようやく妄想から意識が帰還し、元の朝美に戻った。

「ごめんごめん。今年は良いのがいっぱい入ってきたから」

「……お姉ちゃん……」

悪戯っぽい微笑みに苦笑いしか返せない夕。

「それよりも！‘私’とか、女言葉を使うんじゃないの！そして、学校では先生と呼びなさい！」

朝美はトリップしてた割に夕の言葉をよく聞いていた。

「はいはい、わかってますよ」

朝美に感心しつつ、不本意ながらそう応える。

「そう。わかつたんなら早く教室戻りなさいよ」

「えーヤダぁー戻りたくない！」

本気で戻りたくない夕は必殺技を使った！必殺・絶妙な上目遣いで訴える！

「……仕方ないわね。今日だけここで休んでもいいわよ」

平静を装いながらも顔がにやけている朝美だった。

（我が姉ながら何と単純な）

夕は心の中で黒い笑みを浮かべ、表情はあくまでにっこりと笑ってみせる。

「やったー！」

ガラッ

夕の歓喜の声とともに保健室の扉が開いた。

そこに立っていたのは龍二だった。

「夕ちゃんここにいたのかぁ。さぁ、教室戻ろうか？」

夕を見つけた途端、有無を言わさない満面の笑顔で語りかける。

その笑顔に夕はさっきまでの喜びがしぼんでいくのを感じた。

「いや、俺、ちょっと具合悪いから」

と、歯切れの悪い返事をしながら自分の味方であるはずの朝美に助けを求める目線を送った。

しかし、そこには味方など居なかった。

「朝美センセイ、夕ちゃんどこが悪いんですか？」

いつの間にか、朝美の手を握りながら至近距離でフェロモンをまき散らしている龍二。

（先手を打たれたー！）

「別にどこも悪くはないのよ」

頬をほんのり朱に染め、うつとりと龍二を見つめ答える。

「じゃあもう教室に戻ってもいいんですね？」

「ええ、大丈夫よ」

夕に口を挟む暇を与えないほどの早業だった。

さつと夕の方を振り向くと魅惑的な微笑みを浮かべ、夕に近づく。

「さぁ、教室に戻ろうか？」

「い、嫌だぁ！」

怯えた表情で後ずさりしながら、必死で拒否する。

「ほら、そんなワガママ言わないで。さぁ行こう」

そんな夕の態度を全く無視し、がっちりと腕を掴み半分引きずりながら連れていこうとする。

「ほらぁ、もう具合悪くないんだからさつさと教室に戻りなさい」

さっきまで味方だった朝美に背中を押された。

そして、結局龍二に引きずられながら保健室を後にする。

私に味方はいないのかぁ？！

それは魂の叫びだった。

その4 クラスメイトは変人？PART2 (前書き)

どうもお久しぶりですm(_____)mものすごい久しぶりです！本当に、こんな私の小説を読んで下さっている方には申し訳ないです(T^T)見切り発車過ぎて、前が全く見えないんです(スイマセン、ただの言い訳です。すいません)とにかく、少しずつ頑張っていこうと思いますので、評価やら何やらしていただければ感謝の極みです。どうぞ、これからもよろしくお願いします。

その4 クラスメイトは変人？PART2

龍二に引きずられながら教室に戻ると、公平がカメラを片手にカメラを持って待ちかまえていた。

（またかよ…）

げんなりする気持ちを隠そうともせず、露骨に嫌そうな顔をする夕。

「やあ、やっと戻ってきたね」

と言いつつ、早速写真を撮る。

「…勝手に撮るなって言ってるだろ」

夕は更に不機嫌さを増していく。

しかし、そのことを全く気にもとめず公平は不敵に微笑う。

「夕。良いこと教えてあげようか？」

「な、何?!」

誰かを彷彿とさせる微笑みと口調。反射的にイヤな予感を感じてしまふ。

「君の写真は実によく売れるんだ。

拗ねた表情はもちろんの事、滅多にカメラに収められないレアな笑顔は高額でも購入してくれる人が多いんだ」

そこで一度区切り、何の悪びれもなくにつこり笑いながら続ける。

「しかも、男女問わず」

「…は?!」

「男子にも売れてるのはやっぱりあの夕ちゃんに似てるからかなあ…ちなみに全校生徒の結構な人数が買ってるだろうね」

「……」

「あ！ちなみに校外販売も順調だよ」

もう、無理。頭が追いつかない。てか、追いつきたくもない。

と、真っ白になりかけの夕をほったらかしながら会話は進められていた。

「確かに夕ちゃんに似てるよなあ…

で、俺の売れ行きは？」

真剣な顔で問う龍二。

「そうだねえ、夕に並ぶくらいよく売れてるよ。

まあ、その内何かしらの見返りは期待しててよ」

「マジで?! じゃあもつと頑張っちゃおうかな? 夕ちゃんに負けるのも悔しいし」

と、毎度毎度行われる撮影会を始めた。

今ではクラスの恒例。

女子は集合し、黄色い声援を飛ばす。その間男子はというと、教室の隅っこ。昨今の女子たちに逆らってはいけないということをわきまえているのか…。きゃあきゃあ騒がれながら撮影会が行われていた。

「ほらあ、夕ちゃんも一緒に写ろうよ」

もう、真っ白を通り越し風化しそうになっていたところを現実引き戻された。

ハッと気付くと人垣に囲まれていた。

「げっ…なんじゃこりゃ」

いつもの事ながら、この人の壁にはビビってしまう夕だった。この壁は全く隙間が無く、例えあったとしてもすんなりとは逃がしてくれないだろう。

「早く、早く〜!」

と龍二が肩を組んだ。こうなったら逃げ場は皆無。

「夕ちゃんって、ホントに荻堂夕ちゃんと何の関係もないの?」

「は!?! えっ?」

龍二の唐突な質問に、夕はつい狼狽えてしまった。

「なーんか怪しいなあ」

どんどん詰め寄ってくる。

「えーっと、その、あの…」

「ねえ、どうなの夕ちゃん」

「そうだ！どうなんだ？夕」

公平まで便乗してきた。

「あのう…その」

「うるさいわね！！」

突然、凜とした声が響き、三人は一斉にその声の方を見た。

「毎回毎回、いい加減にして下さらない？！」

そこには怒りを露わにした少女がいた。少女は長い艶やかな黒髪をなびかせながら三人に詰め寄る。

「私、騒がしい所嫌いなんですの」

「そんな事言っちゃって」

「何か文句でもございまして？」

公平の反論を丸無視し、微笑みながら少女は言った。その勢いに押され、龍二の後ろに隠れてしまった夕。

「ていうか誰？」

ズバツと聞いたのは龍二だった。

「あなた、私を知らないの？」

「うん」

やけに自信ありげな台詞に、龍二は即答。少女有り得ないとでも言うような表情で固まっている。

「ようし！じゃあ僕が紹介しようじゃないか！」

急にテンションの上がった公平が割り込んできた。

「彼女はの名は早坂 はやさか 巴 ともえ！夕ちゃんと共にここらでは有名な美少女だ！

しかも！！

なんと、あの、早坂財閥の代表の一人娘なのだー！」

実に説明的な紹介ありがとうございます。

その紹介された本人、巴は公平の喋りで冷静さを取り戻し、龍二と夕にどうだと言わんばかりの目線を送る。

巴は確かに美少女だった。

腰まで伸びる艶やかな黒髪。

それと揃いの漆黒の瞳。肌は雪のように白く、ほっそりした身体。夕が可愛い系統なのに対して、彼女は、まさに和風美人というにふさわしかった。

「ふ〜ん：確かに美人だけど、夕ちゃんの方が可愛いよ」

「なっ！？何ですってえ！」

「そうなんだよねえ」

顔はいいのに性格がちよつとキツイのがもったいないんだよね」

素直にばつさり言った龍二に加え、しみじみとそれに賛同する公平だった。

二人はそんな会話を続けていた。

「い・い・か・げ・ん・に・し・て・ちょ・う・だ・い!!」

そこには怒りに震える巴がいた。

「私、その荻堂夕とやらと比べられるの嫌いなんです。と言うより荻堂夕が嫌いなんです。」

どう見ても私の方が美人ですし、頭もいいし、裕福です！
なのに！」

まだ続くようなのでカット！

すっかり冷静さをなくして熱くなっている巴に対し、公平、龍二は冷めた目でそれを見ていた。

「だから、そういうところがダメなんだよね…」

ため息混じりに言う公平。

「こら〜何やってんだ」

授業始めるぞ」

いつの間にか来ていたらしい先生がバンバンと机を叩く。

集まっていた女生徒は一気に席へ戻っていった。

龍二と公平はもうすでに席に着いていた。

いつの間に？

一人取り残されていた夕が席に戻ろうとした時

「きゃっ！」

悲鳴が上がった方を見ると、席へ戻る女生徒に押された巴が夕に倒

れ込んできた。

とっさに巴を抱きとめる夕。

「危なかった〜大丈夫?」

そう言いながら巴の顔を覗き込んだ。

その顔はポストに負けず劣らず真っ赤。

「どうかした?」

思わず夕は聞いた。

「い、いえ…どうもしませんわ」

明らかに動揺している。

「それよりもいつまで私に触れているつもり?」

「はあ、すいません…」

少々呆れながらも、つい謝ってしまった。

「べ、別にあなたが謝る必要はありませんわ

一応、私が助けていただいたのですから」

偉そうな口調とは裏腹に、顔を赤らめながら話している。

「一応お礼は言いますわ、一応よ!」

そして、更に全身の血液が顔にあるんじゃないかと思うくらいの顔色をして、絞り出すように言った。

「…ありがとうございます」

と、同時に猛ダッシュで教室から去っていった巴であった。

「お〜い、早よ席に着かんか、緑川

って、早坂はどうした?」

何がなんだか分からない夕は

「さあ?」

としか答えようがなかった。

続く

ってこれで終わり?今回、影薄くね?!

以上、主人公の心の叫びでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6520a/>

荻堂夕と愉快的仲間たち

2010年10月12日16時05分発行